

〈論 文〉

現代日本語の「ラ抜き形」に関する研究  
—漫画データに基づいて—

張 麗<sup>1</sup> (東京外国語大学外国人研究者)

Research on “Ra elision” forms in Modern Japanese  
Based on actual examples of “Comics”

Zhang, Li (Foreign Researcher, Tokyo University of Foreign Studies)

**キーワード**：ラ抜き形、ラレル形、可能、意図成就、評価的表現

**Keywords**: “Rareru” Forms, “Ra elision” Forms, Potentiality, Fulfillment of Intention, Evaluative Expressions

**要旨**：本論文では、2000 年以降に出版された漫画作品から収集した用例を資料とし、動詞ラ抜き形に関する先行研究の諸観点を検証するとともに、ラレル形と対照することによって、ラ抜き形の表す意味、形態及び構文的特徴などの使用実態を明らかにすることを目的とする。調査した結果、ラ抜き形が特定の文中の位置・特定の文法形式が後続する場合において用いられやすく、可能と意図成就の意味の違いや評価的表現との共起関係の有無がラレル形とラ抜き形の使用傾向の差に関わっていることが確認できた。

**Abstract**: In this paper, I used examples collected from “comics” published after 2000 as materials to verify the viewpoints related to “Ra elision” Forms in previous studies, and compared them with “Rareru” Forms to clarify the meanings, patterns and syntactic features of “Ra elision” Forms.


The findings are as follows, I made it clear that the differences in meaning between “potentiality” and “fulfillment of intention” affect the tendency to use “Rareru” Forms or “Ra elision” Forms. Also, I clarified the preference of grammatical patterns following the two forms, and the features of cooccurrence relations with evaluative expressions.

原稿受理日 (2017-10-02)

査読後掲載決定日 (2018-01-11)

日本研究教育年報. 2018, Vol.22, pp72-90. ISSN 2433-8923

---

<sup>1</sup>  本稿の著作権は著者が保持し、クリエイティブ・コモンズ表示 4.0 国際ライセンス (CC BY) 下に提供します。 <https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/deed.ja>

## 1. はじめに

### 1.1. 本稿の目的

本稿では、現代日本語の一段動詞及びカ変動詞「来る」の「ラ抜き形」(例「見れる」「来れる」などのいわゆる「ラ抜き言葉」)について、2000年以降に出版された漫画作品から収集したデータを用いて調査分析することによって、以下のことを明らかにする。

- (1) 従来の先行研究の調査結果や諸観点の有効性
- (2) 可能と意図成就の意味の違いがラレル形<sup>2</sup>とラ抜き形の使い分けに関与するか否か
- (3) 評価的表現との共起関係の有無がラレル形とラ抜き形の使い分けに関与するか否か
- (4) もし、(2) と (3) をめぐる何らかの傾向が見られた場合の、ラ抜き形の形態、構文的環境をめぐる傾向

本稿では、張 (2011, 2015) で取り上げている 2 つの観点を導入する。第一に「可能」と「意図成就」という意味の違い、第二に評価的表現の有無である。

### 1.2. 「可能か意図成就か」という観点

本稿で用いる「可能」と「意図成就」という意味区分については、張 (2011) で初めてとりあげた (p. 231) が、改めて簡潔に説明する。可能表現に関する代表的な議論である尾上 (1998, 1999, 2003)、川村 (2013)、渋谷 (1993, 2006) を紹介しつつ説明する。

可能表現の表す意味には大きく 2 種類があることが知られている。1つは「僕はたとえ三日かけてもレポートなんか書けない」「最近忙しいから、悠長にレポートなんか書いてられない」「王さんは刺身が食べられない」などの文に現れる意味で、いわゆる「潜在的な行為実現可能性の有無、すなわち通常の意味での〈可能〉〈不可能〉である」(川村2013: 33-34)。尾上 (1998: 93) は、この意味の「可能」を「動作主がその行為をしようという意図を持った場合にその行為が実現するだけの許容性、萌芽がその状況の中に存在する」と定義する。なお、渋谷 (1993) はこの意味の「可能」を「潜在系可能」と呼ぶ。もう1つは「意志的行為の実現」を表す場合である。例えば「今朝は六時に起きられた」「隣の物音がはっきりと聞き分けられた」などのような文に現れる意味で、「一回的な行為が意図したとおりに実現する」(川村2013: 34) という、いわゆる「意図成就」用法である。尾上 (2003) はこのタイプの表現のうち、肯定の場合に限って「意図成就」と定義する。渋谷 (2006)、日本語記述文法研究会 (2009) はこのタイプの表現の表す意味を「実現可能」と呼ぶ。

張 (2011, 2015) はクチコミデータに基づいて調査研究したものだが、クチコミデータには以下のような用例が多く現れている。

---

<sup>2</sup> 本稿では、一段動詞及びカ変動詞「来る」の可能形式である「見られる」「来られる」などをラレル形と呼ぶ。

- (1) 今回、カウントダウンにふさわしい高層階を用意して頂き大変気持ちのいい年越しでした。またホテルだから無理だと思っていた年越し蕎麦も食べれてよかったです。是非記念日イベントは重宝したいホテルです。(男性 30 代)

[http://www.jalan.net/kuchikomi/YAD\\_340565.html](http://www.jalan.net/kuchikomi/YAD_340565.html)

- (2) 内装や設備は宿泊料金に見合っているかと思いますが、機能性においては、いまいちかなと思います。コの字型の内側の部屋で夜景が見られなかったのが残念でした。(男性30代)

[http://www.jalan.net/kuchikomi/YAD\\_313177.html](http://www.jalan.net/kuchikomi/YAD_313177.html)

上記の例 (1)、(2) の用例は、いずれも「ラレル形」または「ラ抜き形」の可能表現が使用されている。例 (1) は、<ラ抜き形 (肯定) + テ>という構成を取っているのに対し、例 (2) は、<ラレル形 (否定) + ノ>という構成を取っている。

上記の 2 つの例は、いずれも可能表現が用いられていて、従来の解釈では、どちらも可能の意味で、肯定形か否定形かという違いしかないように見える。

しかし、尾上 (1998, 1999, 2003) の説に従って捉えるならば、例 (1) の「食べれ」は、「意図した行為が実現した」ことを表しているのだから、意図成就用法であるのに対し、例 (2) の「見られなかった」は、「意図した行為が実現しなかった」ことから、「そのような事態が実現するだけの許容性、萌芽がそもそも存在しなかった」という意味を表すことになり、可能用法だということになる。

張 (2011, 2015) におけるクチコミデータの分析からは、ラレル形は意図成就用法よりも可能用法で、ラ抜き形は可能用法よりも意図成就用法でより多く用いられている印象を受ける。

### 1.3. 評価的表現

「評価的表現」とは、例 (1) (2) の文中に使われている「よかったです」(プラス評価的表現)、「残念でした」(マイナス評価的表現) などのようなものである。例 (1) においては「意志的行為が実現した」という意味を表す「食べれ」の後に「よかったです」という評価的表現が後続している。例 (2) の「意志的行為の不実現 (従って、不可能)」の意味を表す「見られなかった」の後に「残念でした」という評価的表現が後続している。例 (1)、(2) では、これらの評価的表現は文法形式 (例えば「て」「の」) の後に接続していて、<ラレル形 or ラ抜き形 + テ or ノ + (プラス/マイナス評価的表現) >という構成を取っている。例 (1)、(2) に限らず、ラレル形・ラ抜き形は何らかの評価的表現と共起する場合が多いように思われる。

以上のような、可能と意図成就という意味の違いや評価的表現の有無に注目した研究は、管見の限り、従来インターネット上のクチコミデータに基づいた張 (2011, 2015) のみであった。本稿ではクチコミデータに限らず漫画の実例データにおいてもクチコミデータと同様のラ抜き形の使用傾向が認められるか否かを実証的に考察する。

## 2. 先行研究

従来のラ抜き形に関する研究においては、通信であれ面接であれアンケート調査によるもの（岡崎1980、中田1982、加藤1988など）が多いが、個別の動詞を調査対象とする研究が多く、かつ、取り上げられる動詞の種類が調査ごとに異なっているため、研究によって結果に偏りが生じている。そして、特定の構文中の位置に現れる場合のみを対象とする調査が多く、言語使用の実態を十分に反映していないおそれがある。

実例調査としては、「日本語話し言葉コーパス」を用いた調査（佐野2008, 2009）、国会議事録を用いた研究（松田2008）、談話データ（インタビュー）を用いた研究（Matsuda 1993）、テレビ番組の談話や漫画で使用されている実例を用いた研究（木下1995, 1997a, 1997b, 1998, 2000）があげられる。これらの調査は、実例を利用したという点でそれ以前の研究より進んだものといえるが、いずれも可能と意図成就という意味の違いに注目しておらず、評価的表現との共起関係の有無に注目したものもない。

張（2011, 2015）では、尾上（1998, 2003）に従い、可能の意味の下位類を可能と意図成就とに分けて、研究資料をインターネットのクチコミサイトに限定し、そこに書き込まれたクチコミの実例を収集して分析を行い、以下の結果を得た。

- 1) ラレル形とラ抜き形のいずれも肯定表現と共起しやすく、またいずれも特定の文法形式で多く用いられる傾向が見られた。さらに、構文中の位置、及び、後続の文法形式によって使用頻度に偏りが見られた。
- 2) ラ抜き形は、テが後続する環境で現れやすく、その際には意図成就を表す例の割合が高い。また、その後に評価的表現が多く使用されている。つまり、ラ抜き形はテ形で意図成就を表す場合に比較的現れやすく、かつ評価的表現と共起しやすい。

張（2011, 2015）はインターネット上のクチコミデータに限定して調査したものであり、上記の調査結果が一般化できるかどうかさらに検証する必要がある。そこで、本稿では、漫画作品から収集したデータに基づいて調査を行い、張（2011, 2015）の結果と同様の傾向が見られるか検証するものである。

## 3. 資料及び研究対象

### 3.1. 資料

本稿では、研究資料として 2000 年以降に出版された漫画作品（229 冊<sup>3</sup>）を用いる。

ラ抜き形の使用は個人のコミュニティまたは地域によって多少差があると指摘されている（国研 1981, 井上 1998 ほか）。井上（1998: 5）は昔から方言としてラ抜き形が使われている地域として、「北海道と中部地方、中国・四国地方など」を挙げている。これらの調査結果から、東京を含む関東地方は昔からラ抜き形を方言として使う地域ではないというこ

<sup>3</sup> 用例を集めるために、漫画作品計 280 冊を調査した。ラレル形及びラ抜き形が 1 例も現れない作品を除き、残った 229 冊分のデータを分析対象とした。調査した漫画作品は付録「漫画作品リスト」に示してある。

とが分かる。従って、本稿では漫画家の出身地を可能な限り関東<sup>4</sup>に限定することによって、漫画のデータを分析する際に、ラ抜き形の使用への方言による影響を排除するよう努めた。

漫画の実例データを使用するメリットとして、以下の点が挙げられる。

- i) 話し言葉に近い書き言葉であるため、ラ抜き形の研究に適していると思われる。小説の会話文データを利用することも可能であるが、漫画データよりラ抜き形の出現率が低く、収集するのが難しい<sup>5</sup>。漫画のほうが小説より収集が容易である。
- ii) 会話の環境をめぐって、様々な場合の会話が見られる。
- iii) 話者の社会的属性が特定しやすい。

デメリットとして、以下の点が挙げられる。

- i) 手作業で収集するため、収集できる量に限界がある。大規模コーパスから収集した場合と比べてデータの絶対量が小さい。
- ii) 調査結果は登場人物のラ抜き形の使用実態というよりはラ抜き形に関する作者の使用意識の反映である。

本稿は、作者のラ抜き形の使用意識を調査したに過ぎず、デメリット ii) については、今回の調査の限界として留意しなければならないけれども、自然談話の収集が極めて困難であることから、比較的話し言葉に近いテキストの一つとして漫画データによる調査を行うのであり、そのような本稿の目的には必ずしも不適當とは言えない。別種の資料であるクチコミデータ（張 2011, 2015）などの分析結果と比較することによって、漫画データのデメリット ii) はある程度カバーできるものと思われる。

本稿では、以上の諸点に留意しつつ、調査する。

### 3.2. 研究対象

作品中の用例を手作業で一つ一つ収集した。研究対象とする動詞を特に限定せず、作品に出現している全てのラレル形及びラ抜き形の用例を研究対象とする。

用例の抽出に当たっては、個別の動詞やその前後の文脈によって、可能とそれ以外の意味（受け身など）との区別が困難な場合が少なくない。こうした場合、すべてデータから除外し、確実に可能か意図成就の意味と判断できる用例のみ採用した。また、本稿の研究対象とならないもの、例えば、五段動詞の可能表現の例や、レ足す言葉の例、明らかに方言が使用された用例も除外した。さらに、本稿では、ラ抜き言葉を使用する話者と聞き手との対人関係も考察するため、人間以外の存在（妖怪など）の会話例も除外した。

こうして収集した用例は全部で 1045 例ある。そのうちラレル形は 818 例で、ラ抜き形は 227 例である。用例の中には、ラレル形しか現れずラ抜き形がまったく現れない動詞が含まれており、全部で 437 例である。本稿においては、ラ抜き形が現れた動詞に限ってそのラ

<sup>4</sup> 漫画家の出身地は東京都、埼玉県、千葉県、神奈川県である。

<sup>5</sup> 「BCCWJ2009 年度モニター版」の書籍（約 20 万語）を検索したが最も多く使用されやすいと言われていた「見る」のラ抜き形はわずか 10 例で、その他はだいたい「食べれ」（6 例）、「寝れ」（0 例）、「起きれ」（1 例）、「来れ」は 16 例であった。

レル形とラ抜き形を研究対象とする<sup>6</sup>ため、全用例の 1045 例から上記の 437 例を除いて、残った 608 例を研究対象とする。608 例の中のラレル形は 381 例で、ラ抜き形は 227 例である。

#### 4. 結果及び考察

##### 4.1. 性差・世代差・聞き手との対人関係

###### 4.1.1. 性差

話者の性別の内訳を以下の表 1 に示す。男性の発話例は 343 例で、女性の発話例は 259 例である。他に地の文の例が 6 例ある。

性別によってラレル形とラ抜き形の使用率に有意な差があるか否かを検定するために、地の文を除く 602 例を対象にカイ二乗検定を行ったが、有意な差が認められなかった [ $\chi^2 = 0.221$ ,  $df=1$ ,  $n.s.$ ]。すなわち、男性と女性は同じようにラレル形とラ抜き形を使用しているということになる。この結果は、先行研究のうち中本 (1985)、木下 (1997b) の結論、及び張 (2011, 2015) の調査結果とも一致している。

表 1 性別の内訳

	ラレル形	ラ抜き形	合計
男性	217	126	343
女性	159	100	259
地の文	5	1	6
合計	381	227	608

###### 4.1.2. 世代差・聞き手との対人関係

木下 (1998) は、1996 年に放送された番組におけるラ抜き形の用例を集計し分析した結果、ラ抜き形は全ての世代、種々の職業の人間が用いている (p. 231) と述べている。また、木下 (1997b, 2000) は漫画データに出現している「見れる」と「投げれる」の使用場面や使用相手について調査しているが、その結果、「見れる」も「投げれる」も同世代の人や自分より下の世代に対する場合、即ち「気のおけない親しい仲間とのくだけた」場面ではよく使われ、「上の世代に対するかしこまった場面では『投げれる』は使いにくい」 (p. 210) と述べている。

先行研究のこれらの知見を踏まえて、本稿のデータにおけるラ抜き形の用例<sup>7</sup>を、①親しい同世代、②親しい異世代 (上から下)、③親しい異世代 (下から上)、④親しくない間柄、の 4 つのパターンに分けて調査分析を行った。

<sup>6</sup> ただし、ラレル形のみ使用されている動詞の例も張 (2017) 博士論文の本文の第 3 章 3.2.2 節で参照している。

<sup>7</sup> 研究対象としての 227 例から地の文の用例 (1 例) を除き、残った 226 例を考察する。

4つのパターンに従って、漫画データに出現しているラ抜き形の用例数及びその比率を集計し、その結果を図1に示す。以下、図1から分かることを摘記する。

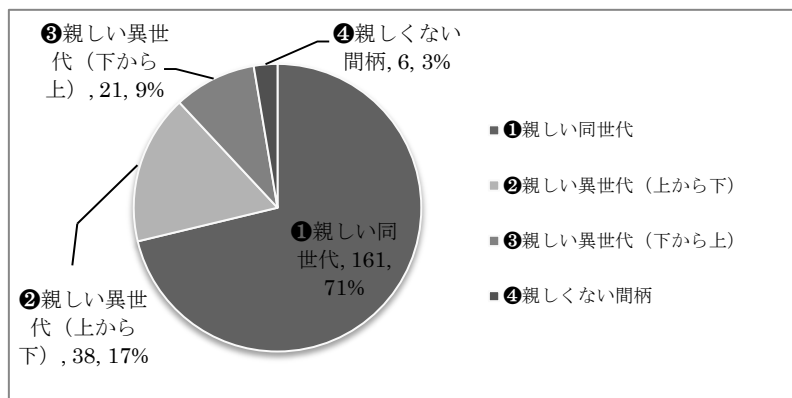


図1 世代差・聞き手との対人関係によるラ抜き形の用例の分布

#### ① 親しい同世代

ラ抜き形は、4つのパターンのうち、同世代間の会話において使用される用例が最も多く161例ある。その中では、話し手・聞き手共に10代の話者同士の会話にラ抜き形が多く使用される傾向が見られ、次いで20代の話者同士の会話でも多く使用されている。年配者同士での使用は10代、20代の若年層と比べてまだ少ないようである。以下の例(3)は女子高校生から同級生への発話である。

(3)「一生食べれなくていいからひつつかないでくださいッ」「かわいーにゃー♡」「ダメ♡それは」(桜2)

#### ② 親しい異世代 (上から下)

目上から目下への発話に見られたラ抜き形の用例が10代～60代以上の全世代に分布している。このパターンのラ抜き形は全部で38例観察された。中でも、10代の話者から後輩や目下への会話ではラ抜き形が最も多く15例使用されている。ラ抜き形の多くは中学生または高校生の先輩から後輩への発話に用いられている。20代以上の世代の話者の会話では、上司対部下、先生対生徒、父親或は母親対娘(息子)或は娘(息子)の恋人、社長対社員、年配のお店の経営者対年下のお客さん、年配の女性対息子の嫁などといった場合にラ抜き形が使用されている。例(4)は年配の女性(60代以上)から息子の嫁(30代)への発話である。

(4)「今までだったら5ふんでうちに来れたけど 転勤先のR市?車飛ばして3時間かかるわよ」(ヒメ2)

#### ③ 親しい異世代 (下から上)

目下から目上への発話では、ラ抜き形の用例は10代及び20代の話者の会話に集中していて、21例観察された。例(5)は女子高校生から先輩の男子高校生への発話である。

- (5)「夕飯あんま食べれなかった」でおなか減っちゃって一こっそりコンビニ行ってきたんですよ よかったら一緒に食べませんか？速人先輩甘いもの好きですよね？」「・・・うん好き」(後にも 2)

#### ④ 親しくない間柄

敵対関係であり、相手に対する配慮が要らない間柄の場合のラ抜き形の用例が 6 例観察された。いずれも同世代間の用例である。ちなみに、親しくなくて配慮が必要な場合の例は現れなかった。例 (6) は若い男性 (社会人) から男子高校一年生への発話である。

- (6)「よし!!!いい度胸だ!!よく来れたな、あれだけやって!! なかなか大したもんだぞ!!」(お茶 6)

以上の 4 つの対人関係のうち、親しい同世代間でラ抜き形が最も多く用いられる傾向が見られた。この結果は木下 (1997b, 1998, 2000) の結果とも一致している。また、異世代間であっても身内で親しい間柄であればラ抜き形が用いられる場合もある。ただし、親しくない間柄でも、聞き手への配慮がまったく必要のない時にラ抜き形が用いられる場合もある。

## 4.2. 動詞の種類

### 4.2.1. 動詞の語幹音節数

研究対象となる 608 の用例に含まれる動詞を、それぞれ語尾を除いた音節数 (1~4) 順で表 2 に示す。

表 2 に見られるように、ラ抜き形の 1 音節語~4 音節語のそれぞれの用例数と比率<sup>8</sup>を多い順に並べると、192 (56.8%) > 32 (8.7%) > 2 (0.7%) > 1 (1.9%) である。すなわち、1 音節語~3 音節語のラ抜き形は語幹音節数の増加とともに、出現率が減少している傾向が見られる。語幹 3、4 音節の比率は共に低いが、4 音節語はもともと出現している動詞の延べ語数が少なく、わずか 56 例なので、比率 (1.9%) は 3 音節語の比率 (0.7%) より少し高くなっているのである。

語幹 1 音節の動詞のラ抜き形の出現総用例数はラ抜き形総用例数 227 例の 84.6%を占めており、半分以上である。動詞を個別に見ていくと、「見る」「寝る」「着る」「来る」の 4 つの動詞はいずれもラ抜き形がラレル形よりも出現用例数が多い。これらのデータにより、ラ抜き形は日常会話でよく使われる動詞、なおかつ短い動詞に多く用いられやすいことが分かる。本稿の調査結果も、張 (2011, 2015) の結果と一致し、井上 (1998: 9) <sup>9</sup>の記述を裏付けることができたと言える。ただし、そもそも漫画作品に書かれているセリフは日常会話を中心とするため、語幹が長く普段あまり使わない (従ってラ抜き形出現率が低い) 動詞はほとんど用いられない。

<sup>8</sup> 比率の計算方法は、【音節数ごとのラ抜き形出現用例数】÷【当該音節数語の総用例数】×100%である。例えば、ラ抜き形の 1 音節数語の比率は、1 音節数語の用例数 (192 例) ÷ 【1 音節数語のラレル形・ラ抜き形の総用例数 (327) + ラレル形の例のみ見られる 1 音節動詞の用例数 (11)】 = 56.8%

<sup>9</sup> 井上 (1998: 9) では、ラ抜き形が日常よく使われる動詞に多く、なおかつ短い動詞に多いと述べている。



表2 各動詞のラレル形とラ抜き形の内訳<sup>10</sup>

音節数	動詞	ラレル形	ラ抜き形	合計
1 音節語	来る <sup>11</sup>	18	84	102
	見（観）る	22	65	87
	出る	38	23	61
	い（居）る	55	9	64
	寝る	1	8	9
	着る	1	3	4
合計	6 <sup>12</sup>	135(35.4) <sup>13</sup>	192(84.6)	327
2 音節語	食べる	47	18	65
	起きる	2	5	7
	借りる	5	3	8
	あ（上）げる	26	1	27
	や（辞）める	10	1	11
	見せる	10	1	11
	開ける	1	1	2
	逃げる	26	1	27
合計	8	140(36.8)	32(14.1)	172
3 音節語（2）	信じる	106	1	107
	沈める	0	1	1
合計	2	106(27.8)	2(0.9)	108
4 音節語（1）	切り抜ける	0	1	1
合計	1	0(0.0)	1(0.4)	1
総合計	17	381	227	608

## 4.2.2. 活用の種類

先行研究では、Matsuda（1993）、佐野（2009）、張（2011, 2015）の調査のいずれもラ抜き形が下一段より上一段に多く用いられるとの結果を得ている。本稿では、この点についても確認する。調査対象としたラレル形とラ抜き形の総用例 608 例のうち、動詞の活用の種類ごとに用例数を集計した結果を本節末尾の表 3 に示す。

<sup>10</sup> 表 2 の動詞は音節数ごとにラ抜き形の用例数が多い順で並べてある。ラ抜き形の出現用例数が同様である場合、ラレル形の用例数の多い順で並べる。なお、括弧の中の数値は比率であり、「%」を省略した。

<sup>11</sup> 補助動詞としての用例数も含まれている。

<sup>12</sup> この数値は当該動詞の異なり語数である。それ以降の同列の数値も同様である。

<sup>13</sup> 括弧の中の比率は当該音節数のラレル形がラレル形総用例数 381 例に占める割合であり、その右の同行の括弧の中の数値は当該音節のラ抜き形がラ抜き形総用例 227 例に占める割合である。以下同様。

表 3 に見られるように、ラレル形・ラ抜き形のいずれも下一段動詞より上一段動詞の出現率が高い。ただし、ラレル形ではカ変動詞の出現率が一番低いのに対し、ラ抜き形ではカ変動詞の出現率が下一段動詞より高い。

ラレル形とラ抜き形がいずれも下一段動詞より上一段動詞に多く用いられやすいということはカイ二乗検定でも確認された。ラ抜き形が下一段より上一段で多く用いられやすいという結果は先行研究の Matsuda (1993)、佐野 (2009)、張 (2011, 2015) と一致している。

以上、今回のデータに限って言えば、ラレル形とラ抜き形のいずれも下一段動詞より上一段動詞において多く用いられる傾向が確認できた。

表3 ラレル形とラ抜き形の活用の分布<sup>14</sup>

活用 形式	ラレル 形	ラ抜き 形	合計
上一段	191 (50.1)	85 (37.4)	276 (45.4)
下一段	171 (44.9)	58 (25.6)	229 (37.7)
カ変	19 (5.0)	84 (37.0)	103 (16.9)
合計	381	227	608

表4 複合/補助動詞の出現率<sup>15</sup>

動詞		ラレル形	ラ抜き形	合計
複合動詞		0	1	1
くる	補助動詞	4 (3.9)	38 (37.3)	42
	本動詞	14 (13.7)	46 (45.1)	60
あげる	補助動詞	14(66.7)	1(3.7)	15
	本動詞	12(44.4)	0	12
合計		44	86	130

#### 4.2.3. 複合動詞/補助動詞/使役動詞

従来の先行研究では、ラ抜き形が複合動詞・補助動詞に現れるか否かをめぐって対立した意見があった。Matsuda (1993: 19) の研究では、ラ抜き形は複合動詞・補助動詞・使役動詞には現れないとの結果を得ており、松田 (2008) においても、補助動詞・複合動詞では革新形 (本稿で「ラ抜き形」と呼ぶ) はそれぞれ 1 例しか現れず、Matsuda (1993) とほぼ一致した結果を得ていると述べている (p. 130)。これに対し、佐野 (2009: 350) ではラ抜き形が複合動詞、使役動詞にも 77 例観察されたと述べている。

調査結果を表 4 に示す。表 4 に見られるように、ラ抜き形は複合動詞 (1 例)、補助動詞 (39 例) が観察された。なお、使役動詞はラレル形のみ現れ、ラ抜き形は 1 例もない。

以上、今回の調査に限って言えば、ラ抜き形は複合動詞で現れるほか、補助動詞においても現れている。

<sup>14</sup> 枠の中の数字はそれぞれラレル形とラ抜き形の活用の種類ごとの用例数を表す。括弧の中の数字はそれぞれの場合の出現数がそれぞれラレル形とラ抜き形の総用例数に占める割合である。ラレル形の総用例数は 381 例で、ラ抜き形の総用例数は 227 例である。

<sup>15</sup> 使役動詞はラレルのみ現れているため、表 4 に掲載しないこととする。

### 4.3. 肯定形か否定形か

ラ抜き形は肯定形と否定形のどちらで現れやすいかについて、否定形のほうがリードしていると主張する先行研究（中田 1982, 田中 1983, 加藤 1988, 佐野 2009）と、肯定形がリードしていると主張する先行研究（Matsuda1993, 船木 2002<sup>16</sup>, 張 2011, 2015 など）との間で対立が見られる。漫画データに出現しているラレル形とラ抜き形を、肯定/否定形別に集計した結果を表 5 に示す。

表 5 の肯定形/否定形の出現用例数及び出現率を比較すると、ラレル形の肯定形は 162 例でラレル形総用例数中 42.5%である。それに対して、否定形は 219 例でラレル形総用例数中 57.5%である。ラレル形は肯定形より否定形のほうの出現率が高い。一方、ラ抜き形の肯定形は 130 例でラ抜き形総用例数中 57.3%である。否定形は 97 例でラ抜き形総用例数中 42.7%である。ラ抜き形は否定形より肯定形のほうの出現率が高い。以上の数値について、カイ二乗検定で確認したところ、有意な差が見られた [ $\chi^2=12.397$ ,  $df=1$ ,  $p<.01$ ]。

以上、本稿のデータに限って言えば、ラ抜き形はラレル形より肯定形で用いられやすい傾向があると言える。この結果は、Matsuda (1993)、船木 (2002)、張 (2011, 2015) の結果と一致している。

表 5 肯定/否定形の分布<sup>17</sup>

	ラレル形	ラ抜き形	合計
肯定形	162(42.5)	130(57.3)	292
否定形	219(57.5)	97(42.7)	316
合計	381	227	608

表 6 主節/従属節の分布<sup>18</sup>

	ラレル形	ラ抜き形	合計
主節	219 (57.5)	109 (48.0)	328
従属節	162 (42.5)	118 (52.0)	280
合計	381	227	608

### 4.4. 主節か従属節か

ラレル形とラ抜き形が主節と従属節のどちらで出現しやすいかについて、Matsuda(1993)は埋め込み文内よりは主文内の方が革新形（ラ抜き形）が使われやすいとの結果を得ているが、佐野 (2009: 348) は主節よりも従属節のほうがラ抜き形の比率が高いと述べている。張 (2017) における口コミデータからの調査結果は佐野 (2009) の結果と一致している。

今回の調査データから主節と従属節における用例数を集計した結果を前ページの表 6 に示す。

ラレル形の主節の用例は 219 例でラレル形総用例数中 57.5%である。それに対してラレル形の従属節の用例は 162 例でラレル形総用例数中 42.5%である。ラレル形は従属節より主節の用例の出現率のほうが高い。一方、ラ抜き形においては、主節の用例は 109 例でラ

<sup>16</sup> 船木 (2002: 125) では、会話性の強い漫画誌・TV 番組では肯定形が多いと述べている。

<sup>17</sup> 括弧の中の比率は肯定形・否定形それぞれの出現用例数がラレル形総用例数 (381 例) またはラ抜き形総用例数 (227 例) に占める割合である。

<sup>18</sup> 括弧の中の比率は当該形式がそれぞれラレル形またはラ抜き形の総用例数に占める割合である。

抜き形総用例数中 48.0%である。従属節の用例は 118 例でラ抜き形総用例数中 52.0%である。ラ抜き形は主節より従属節の用例の出現率が高い。

次に、ラレル形とラ抜き形のそれぞれの従属節における出現率を比較すると、ラレル形の従属節の出現率は 42.5%で、ラ抜き形の従属節における用例の出現率は 52.0%であり、ラ抜き形はラレル形より従属節で多く用いられている。カイ二乗検定の結果でも有意な差であることが確認された [ $\chi^2=5.127, df=1, p<.05$ ]。すなわち、ラ抜き形の方がラレル形よりも従属節で用いられやすいということである。ラ抜き形のこの結果は先行研究の佐野(2009)、張(2017)と一致している。

#### 4.5. 可能か意図成就か

1.3. で注目した「可能」と「意図成就」という意味の違いと、ラレル形・ラ抜き形という形式の違いとの関係について検討する。両形式それぞれの可能用法と意図成就用法の用例数を集計し、その結果を表 7 に示す。

表 7 ラレル形とラ抜き形の意味用法<sup>19</sup>

意味\形式	ラレル形	ラ抜き形	合 計
可 能	373(97.9)	184(81.1)	557
意図成就	8 (2.1)	43(18.9)	51
合 計	381	227	608

表 7 では、ラレル形の可能用法は 373 例でラレル形総用例数中 97.9%である。ラレル形の意図成就用法は 8 例でラレル形総用例数中 2.1%である。従って、ラレル形の可能用法は意図成就用法より出現率が高い。一方、ラ抜き形においても、可能用法は 184 例でラ抜き形総用例数中 81.1%であり、意図成就用法は 43 例でラ抜き形総用例数中 18.9%である。従って、ラ抜き形の可能用法も意図成就用法より出現率が高い。つまり、ラレル形とラ抜き形はいずれも意図成就用法より可能用法で多く用いられる傾向がある。例(7)はラ抜き形の可能用法の用例で、例(8)はラ抜き形の意図成就用法の用例である。

(7) 「このままこの海が消えればショコラは閉じ込められる 二度とは出て<sup>これな</sup>  
<sup>い</sup>でしょう」(シュ 5)

(8) 「え? ハイ ちょっと<sup>寝れました</sup>から大丈夫です」「バカ 体じゃねえよゆっく  
り一人にならなくていいのかってんだ」(魔 14)

ラレル形とラ抜き形それぞれの意図成就用法の出現率を比較すると、ラ抜き形の意図成就用法の比率(18.9%)がラレル形の意図成就用法の比率(2.1%)より高い。カイ二乗検

<sup>19</sup> 括弧の中の比率は当該形式がそれぞれラレル形またはラ抜き形の総用例数に占める割合である。

定の結果でも有意な差が見られた [ $\chi^2=52.513$ ,  $df=1$ ,  $p<.01$  ]。この結果は張 (2011, 2015) と一致している。

以上、漫画データに限って言えば、ラレル形とラ抜き形はいずれも意図成就用法より可能用法で多く用いられる傾向が見られた。また、ラ抜き形のほうがラレル形より意図成就用法の出現率が高い傾向がある。

#### 4.6. 文中の位置をめぐる分布

ラレル形とラ抜き形はそれぞれどのような構文環境で現れやすいのか、調査した結果を表 8 に示す。

表 8 ラレル形とラ抜き形の構文中の位置<sup>20</sup>

文中及び文末用法			ラレル形	ラ抜き形	合計
文中用法	連体用法 <sup>21</sup>	名詞後続	40(10.5)	16(7.1)	56
		テ	15(3.9)	18(7.9)	34
	連用用法 <sup>22</sup>	シ	3(0.8)	10(4.4)	13
文末用法(ナイ以外)	下接形式なし		91(23.9)	29(12.8)	120
		ノダ	37(9.7)	33(14.5)	70
	下接形式あり <sup>23</sup>	ヨ	10(2.6)	11(4.9)	21
		カモシレナイ	3(0.8)	10(4.4)	13

表 8 では、ラ抜き形の出現率 4.0%以上を基準に出現率の高いラレル形・ラ抜き形の用法を取り出してある。表には可能形式に下接する形式を示している。例えば表の「名詞後続」は「見れないもの」「出れる形」などのことである。当該形式が後続するラ抜き形の出現用例数が多い順に並べた。

ラレル形・ラ抜き形のいずれも用例数が多く見られたのは、文中用法では連体用法のうち、名詞が後続する場合、連用用法のうち、テ、シが下接する場合、文末用法のうち、下接形式なしの場合とノダ、ヨ、カモシレナイが下接する場合、以上の 7 つの場合である。

<sup>20</sup> 括弧の中の数値はラレル形・ラ抜き形それぞれの全用例数に占める比率である。

<sup>21</sup> 本稿の元になった博士論文では、「連体用法」として、名詞が後続する「名詞後続」の場合とは別に、準体助詞ノが後続する場合（ノ用法）を計上している。

<sup>22</sup> なお、連用用法のラレル形の全用例数は 117 例で、ラレル形総用例数中 30.7%である。ラ抜き形の連用用法の全用例数は 29 例でラ抜き形総用例数中 12.8%である。

<sup>23</sup> 「下接形式あり」のラレル形全用例数は 126 例でラレル形総用例数中 33.1%であり、「下接形式あり」のラ抜き形の全用例数は 99 例でラ抜き形総用例数中 43.6%である。

## 4.7. 評価的表現との組み合わせ

1.3. ではラレル・ラ抜き形が何らかの評価的表現と共起する場合が多いようだと言ったが、この点について両形式の評価的表現と共起する用例数及びその比率に基づき検討する。ラレル形・ラ抜き形それぞれが評価的表現を伴うか否かを調べるために、評価的表現と共起する例と共起しない例を集計し、その結果を表 9 に示す。

表 9 評価的表現との共起の有無<sup>24</sup>

	ラレル形			ラ抜き形			合計
	文中	文末	合計	文中	文末	合計	
共起する例	7 (1.8)	0 (0.0)	7 (1.8)	14 (6.2)	0 (0.0)	14 (6.2)	21
共起しない例	156 (40.9)	218 (57.2)	374 (98.2)	86 (37.9)	127 (56.0)	213 (93.8)	587
合計	163	218	381	100	127	227	608

表 9 に見られるように、ラレル形とラ抜き形の評価的表現との共起関係が見られた用例はいずれもそれぞれの文中用法に集中しており、文末用法には評価的表現との共起関係が 1 例も見られなかった。例 (9) と例 (10) は評価的表現との共起関係が見られた用例である。いずれもラ抜き形の文中用法における例である。例 (9) では「来れなくて」の後に「残念だったねえ」という評価的表現が後続している。例 (10) では、「見れなくて」の後に「安心した」という評価的表現が後続している。

(9) 「ハルヒちゃんのお父さん参観日<sup>来れなく</sup>て残念だったねえ」「うちはお休みの日は家族で出かけるんだー♡」(桜 3)

(10) 「久しぶりに顔<sup>見れ</sup>て安心した」「わ・・・私もです」(東京 13)

ラレル形の文中用法において評価的表現を伴う例が 7 例でラレル形総用例中 1.8%であり、ラ抜き形の文中用法において評価的表現を伴う例が 14 例でラ抜き形総用例数中 6.2%である。したがって、ラレル形よりラ抜き形のほうが文中用法において評価的表現を伴う例が多い。カイ二乗検定の結果でも有意な差が見られた [ $\chi^2=7.998$ ,  $df=1$ ,  $p<.05$ ]。この結果は張 (2011, 2015) の結果と一致している。

以上、漫画データに限って言えば、ラレル形とラ抜き形はいずれも評価的表現を伴う例が文中用法に集中している。ただし、ラ抜き形のほうがラレル形より評価的表現を伴う例の出現率が高い傾向がある。

評価的表現との共起がどのような場合に多いのかをさらに詳しく検討する。

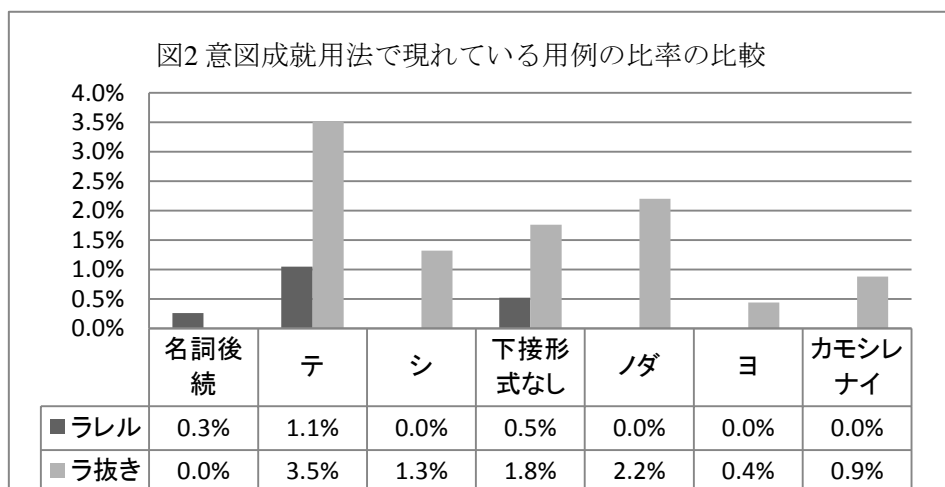
ラレル形・ラ抜き形の文中・文末用法のうち、表 8 で示した用例数の多い 7 つの場合 (個

<sup>24</sup> 括弧の中の比率は当該項目の出現用例数がそれぞれのラレル形とラ抜き形の総用例数に占める割合である。

別用法) について、形態、意味、評価的表現との共起関係の有無、の諸観点を組み合わせて用例の分布を表 10 にまとめる。また、表 10 のデータのうち、意図成就用法で用いられる用例の比率を取り出し、図 2 に示して比較する。

表 10 各用法及び後続する評価的表現の用例の比率

			ラレル形	共起関係	ラ抜き形	共起関係
名詞後続	可能	肯定	18 (4.7)	0 (0.0)	10 (4.4)	0 (0.0)
		否定	21 (5.5)	0 (0.0)	6 (2.6)	0 (0.0)
	意図成就	肯定	1 (0.3)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)
テ	可能	肯定	1 (0.3)	1 (0.3)	1 (0.4)	0 (0.0)
		否定	10 (2.6)	1 (0.3)	9 (4.0)	4 (1.8)
	意図成就	肯定	4 (1.1)	2 (0.5)	8 (3.5)	8 (3.5)
シ	可能	肯定	2 (0.5)	0 (0.0)	4 (1.8)	0 (0.0)
		否定	1 (0.3)	0 (0.0)	3 (1.3)	0 (0.0)
	意図成就	肯定	0 (0.0)	0 (0.0)	3 (1.3)	0 (0.0)
下接形式 なし	可能	肯定	14 (3.7)	0 (0.0)	9 (4.0)	0 (0.0)
		否定	75 (19.7)	0 (0.0)	16 (7.1)	0 (0.0)
	意図成就	肯定	2 (0.5)	0 (0.0)	4 (1.8)	0 (0.0)
ノダ	可能	肯定	10 (2.6)	0 (0.0)	10 (4.4)	0 (0.0)
		否定	27 (7.1)	0 (0.0)	18 (7.9)	0 (0.0)
	意図成就	肯定	0 (0.0)	0 (0.0)	5 (2.2)	0 (0.0)
ヨ	可能	肯定	3 (0.8)	0 (0.0)	5 (2.2)	0 (0.0)
		否定	7 (1.8)	0 (0.0)	5 (2.2)	0 (0.0)
	意図成就	肯定	0 (0.0)	0 (0.0)	1 (0.4)	0 (0.0)
カモシレ ナイ	可能	肯定	3 (0.8)	0 (0.0)	1 (0.4)	0 (0.0)
		否定	0 (0.0)	0 (0.0)	7 (3.1)	0 (0.0)
	意図成就	肯定	0 (0.0)	0 (0.0)	2 (1.0)	0 (0.0)



クチコミデータを分析した張（2011, 2015）では、両形式の文中・文末用法すべての中で、ラ抜き形のテ形が意図成就の意味で用いられる場合に、評価的表現が最もよく共起するという結論を得ている。

本稿で取り上げた漫画データの場合、まず図2から分かるように意図成就の意味で用いられる両形式は、名詞後続の場合を除いてラ抜き形の方が使用比率が高い。また、表10から分かるように、用例の絶対数で比べても、意図成就を表す場合は、名詞後続の場合を除いてラ抜き形の方が優勢である。さらに、表10の「共起関係」欄を見ると、明らかなようにラ抜き形のテ形の場合が8例と、両形式をとおして最も多い。漫画データにおいても、張（2011, 2015）と同様の結論が得られたことになる。

## 5. まとめ

本稿では、漫画データに基づいて行った調査により、以下の結果を得た。

1. ラ抜き形の使用頻度をめぐる性別差は認められない。
2. ラ抜き形は同世代間で最もよく用いられる傾向がある。異世代間であっても身内で親しい間柄であればラ抜き形が用いられる場合もある。ただし、親しくない間柄でも聞き手への配慮がまったく必要のない時はラ抜き形が用いられる場合がある。
3. 語幹1音節語～3音節語のラ抜き形は語幹音節数の増加とともに出現率が減少する傾向が見られる。ラ抜き形で語幹が4音節のものは「切り抜ける」のみであった。5音節以上の語はラレル形しか現れずラ抜き形の用例は無かった。
4. ラ抜き形は複合動詞（1例）、補助動詞（38例）でも観察された。
5. ラ抜き形は下一段動詞より上一段動詞において多く用いられる傾向が確認できた。
6. ラレル形はラ抜き形より主節において多く用いられ、ラ抜き形はラレル形より従属節において多く用いられる傾向がある。
7. ラレル形・ラ抜き形のいずれも意図成就用法より可能用法で多く用いられる傾向がある。



ただし、ラレル形よりラ抜き形のほうが意図成就用法の出現率が高い傾向がある。

8. ラレル形・ラ抜き形のいずれも評価的表現を伴う例は文中用法に集中している。また、ラ抜き形はラレル形より評価的表現を伴う例の出現率が高い傾向がある。
9. ラ抜き形が評価的表現を伴う場合、テ形で意図成就を表す場合の例が最も多い。かつこの場合は、ラレル形を含めた全ての文中・文末諸用法の用例中、評価的表現を伴う用例数が多い。

本稿では、調査対象とする動詞を 7 つの動詞に限定し、限られた場面におけるメッセージを分析した張（2011, 2015）と違い、漫画データを用いて、様々な場面の会話におけるラ抜き形の使用実態、及び様々な動詞のラ抜き形の用例を収集し網羅的に調査分析できた。その結果、張（2011, 2015）とほぼ一致した結果を得た。本稿では、先行研究の諸観点を検証できたと同時に、可能と意図成就の意味の違いや、評価的表現との共起関係の有無がラレル形とラ抜き形の使用傾向の差に関与することも確認できた。今後、さらに漫画の用例を増やして分析していきたい。

#### <追記>

本論文は、博士論文「現代日本語の可能表現に関する研究―一段動詞及びカ変動詞「来る」を中心に―」（2017 年 6 提出、11 月博士号取得）の第 3～6 章のうち、「漫画データ」に関する部分を元に加筆・修正したものである。

#### 参考文献

- 井上史雄（1998）「ラ抜きことばの背景」『日本語ウォッチング』岩波新書, pp.2-31
- 岡崎和夫（1980）「『見レル』『食べレル』型の可能表現について―現代東京の中学生・高校生について行った一つの調査から―」『言語生活』340, pp.64-70
- 尾上圭介（1998）「文法を考える6 出来文（2）」『日本語学』17-10, pp.90-97
- 尾上圭介（1999）「文法を考える7 出来文（3）」『日本語学』18-1, pp.86-93
- 尾上圭介（2003）「ラレル文の多義性と主語」『言語』32-4, pp.34-41
- 加藤和夫（1988）「現代首都圏女子大生における可能表現使用の一実施」『和洋国文研究』23, 和洋女子大学国文学会, pp.110-129
- 川村 大（2013）「ラレル形述語文における自発と可能―古代語からわかること―」『日本語学』32-12, pp.30-42
- 木下哲生（1995）「一段動詞及びカ変動詞の可能動詞現象の現状（1970 年以降の漫画と 1993 年以降のテレビ番組を資料として）」『防衛大学紀要（人文科学分冊）』71, pp.79-116
- 木下哲生（1997a）「1995 年のテレビ番組における一段動詞およびカ行変格活用動詞の可能動詞―いわゆる「ら抜き言葉」の用例と分析」『防衛大学校紀要 人文科学分冊』74, pp.125-152

- 木下哲生 (1997b) 「漫画における『見れる』の現状と用法の広がり」『防衛大学校紀要 (人文科学分冊)』 75, pp.61-98
- 木下哲生 (1998) 「1996 年に放送された番組における「ら抜き言葉」の用例と分析」『防衛大学校紀要 人文科学分冊』 76, pp.195-231
- 木下哲生 (2000) 「漫画における『投げれる』の現状と広がり」『防衛大学校紀要 (人文科学分冊)』 80, pp.195-221
- 国立国語研究所(1981)「大都市の言語生活分析編」『国立国語研究所報告』 70-1, 三省堂 pp.235-345
- 佐野真一郎 (2008) 「『日本語話し言葉コーパス』に現れる「さ入れ言葉」に関する数量的分析」『言語研究』 133, pp.77-106
- 佐野真一郎 (2009) 「現代日本語のヴォイスにおける進行中の言語変化に関する数量的研究 ―「ら抜き言葉」, 「さ入れ言葉」, 「れ足す言葉」を例として―」『Sophia Linguistica』 57, pp.343-358
- 渋谷勝己 (1993) 「日本語可能表現の諸相と発展」第 1 部『大阪大学文学部紀要』 33-1, pp.1-199
- 渋谷勝己 (2006) 「第 2 章 自発・可能」, 小林隆他共著『シリーズ方言学 2 方言の文法』岩波書店, pp.47-92
- 張 麗 (2011) 「現代日本語における可能表現に関する研究―一段動詞及び「来る」の規範形とラ抜き形を中心に―」東京外国語大学大学院博士後期課程論叢『言語・地域文化研究』 17, pp.227-244
- 張 麗 (2015) 「現代日本語における「ラ抜き形」に関する研究―Web サイトのクチコミデータを用いて―」東京外国語大学日本専攻『日本研究教育年報』 19, pp.39-57
- 張 麗 (2017) 「現代日本語の可能表現に関する研究―一段動詞及び「来る」を中心に」2017 年度博士論文
- 中田敏夫 (1982) 「可能表現変遷に関する検証―現代東京の高校生の調査より―」『日本語研究』 5, 東京都立大学国語研究室, pp.64-71
- 中本正智 (1985) 「東京語のゆれについての考察」『東京都立大学人文学会 人文学報』 173, pp.149-169
- 松田謙次郎 (2008) 「第 5 章 東京出身議員の発話に見る「ら抜き言葉」の変異と変化」『国会会議録を使った日本語研究』 ひつじ書房, pp.111-134
- Matsuda, Kenjiro (1993) Dissecting analogical leveling quantitatively: The case of the innovative potential suffix in Tokyo. *Japanese Language variation and change*, 5, 1-34.

[漫画作品リスト]

論文中の引用に用いられている略称とその番号に対応する出典は以下のとおりである。なお、漫画データの最終確認日付は2016年8月である。

赤松健『魔法先生ネギま!』14~30,36 (魔) (2006~2011)  
 秋本治『こちら葛飾区亀有公園前派出所』133~136,140,141,143 (こちら) (2003~2004)  
 安野モヨコ『働きマン』1~4 (働) (2004~2007)  
 安野モヨコ『バッファロー5人娘』(バッファロー) 2013  
 安野モヨコ『シュガシュガルー』1~8 (シュ) (2004~2007)  
 岩代俊明『カガミガミ』1 (カガミ 1) 2015  
 羽海野チカ『ハチミツとクローバー』1~10 (ハ) (2002~2006)  
 羽海野チカ『3月のライオン』2 (3月 2) 2008  
 浦沢直樹『20世紀少年』15~20,22 (20世紀) 2004~2007  
 浦沢直樹『21世紀少年㊦』(21世紀㊦) 2007  
 浦沢直樹『MONSTER』15 (MON15) 2000  
 大場つぐみ『DEATH NOTE デスノート』7,8 (D7,8) 2005  
 神尾葉子『花のち晴れ~花男 Next Season~』1 (花 1) 2015  
 川上ちひろ『後にも先にもキミだけ』1~4 (後にも) 2012~2013  
 菅野文『オトメン (乙男)』1~3,7~14,16 (オトメン) 2007~2012  
 北川みゆき『罪に濡れたふたり』15,17,18 (罪) 2004~2015  
 玖保キリコ『ヒメママ』1~3 (ヒメ) 2007~2009  
 咲坂伊緒『ストロボ・エッジ』1 (ストロボ 1) 2007  
 咲坂伊緒『アオハライド』1~3,7 (アオハライド) 2011~2013  
 桜沢エリカ『Love or Work?』(Love) 宝島社 2013  
 桜沢エリカ『天使の棲む街』(天) 祥伝社 2005  
 桜沢エリカ『エデン』(上), (下) (エデン (上) (下)) 2014  
 ジョージ朝倉『テケテケ★ランデブー』1 (テケ 1) 祥伝社 2010  
 曾田正人『カペタ capeta』1,2,4~8,12,13 (カ) 2003~2007  
 高橋陽一『キャプテン翼 GOLDEN-23』4,6,7,9,11 (キャ) 2006~2008  
 高橋陽一『キャプテン翼 ROAD TO 2002』6,11 (キャ R) 2002~2003  
 高屋奈月『リーゼロッテと魔女の森』1~4 (リー) 2012~2013  
 稚野鳥子『東京アリス』9~15 (東京) 2012~2015  
 綱本将也『GIANT KILLING ジャイアントキリング』4,6,8 (GIANT) 2008  
 とよ田みのる『友達100人できるかな』1~3 (友達) 2009~2010  
 西島大介『ディエンビエンフー』1 (ディ 1) 2007  
 西森博之『お茶にごす。』1~6,7,9 (お茶) 2007~2009  
 ニノ宮知子『のだめカレンタービレ』24,25 (のだめ) 2010  
 葉月かなえ『好きっていいなよ。』9~14 (好き) 2012~2015  
 葉鳥ビスコ『桜蘭高校ホスト部』2~4,11,17 (桜) 2003~2011  
 福満しげゆき『僕の小規模な生活』1 (僕 1) 講談社 2007  
 藤巻忠俊『黒子のバスケ』1~8 (黒子) 2009~2010  
 藤村真理『きょうは会社休みます。』2~4,7,8 (きょう) 2012~2015  
 古屋兎丸『nパイ』1 (n1) 小学館 2003  
 細野不二彦『電波の城』1,3,8 (電波) 2006~2009  
 槇村さとる『Real Clothes』8,10~13 (Rea) 2009~2011  
 槇村さとる『YES!』1~3 (YES) 2012~2013  
 皆川亮二『PEACE MAKER ピースメーカー』7 (PE7) 2011  
 南塔子『360℃マテリアル』5~8 (360℃) 2011~2012  
 南マキ『声優かつ!』3~9,12 (声優) 2010~2013  
 美森青『B.O.D.Y.』9~11,13~15 (BODY) 2007~2009  
 宮城理子『メイちゃんの執事』19 (メイ 19) 2012  
 宮坂香帆『僕達は知ってしまった』1,3,4,6,9,10,13 (僕達) 2007~2011  
 森川ジョージ『はじめの一步』62~64,68,71 (は) 2002~2004  
 森恒二『自殺島』1,3~5,8 (自殺) 2009~2012  
 山田玲司『絶望に効くクスリ one on one』2,3,9 (絶) 2004~2007  
 由貴香織里『ゴッドチャイルド』2~8 (ゴ) 2002~2004  
 由貴香織里『異域之鬼』3 (異 3) 2011  
 由貴香織里『妖精標本』1,2 (妖精) 2005~2006  
 由貴香織里『ルードヴィツヒ革命』(ルード) 2004  
 由貴香織里『ルードヴィツヒ革命』2,4 (ルード) 2007  
 由貴香織里『人形宮廷楽団』1,2 (人形) 2009